
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 尤《もつと》も

|：ルビの付いていない漢字とルビの付く漢字の境の記号
(例) 霧島 | 躑躅《つつじ》

桜 さつぱりした雨上りです。尤《もつと》も花の萼《がく》は赤いなりについてゐますが。

椎 わたしもそろそろ芽をほごませう。このちよいと鼠がかつた芽をね。

竹 わたしは未だに黄疸《わうだん》ですよ。……………

芭蕉 おつと、この緑のランプの火屋《ほや》を風に吹き折られる所だつた。

梅 何だか寒気がすると思つたら、もう毛虫がたかつてゐるんだよ。

八つ手 痒《かゆ》いなあ、この茶色の産毛《うぶげ》のあるうちは。

百日紅《さるすべり》 何、まだ早うござんさあね。わたしなどは御覧の通り枯枝ばかりさ。

霧島 | 躑躅《つつじ》 常 常談云つちやいけない。わたしなどはあんまり忙しいもんだから、今年だけは
つい何時にもない薄紫に咲いてしまつた。

霸王樹《サボテン》 どうでも勝手にするが好いや。おれの知つたことぢやなし。

石榴《ざくろ》 ちよいと枝一面に蚤のたかつたやうでせう。

苔 起きないこと？

石 うんもう少し。

楓 「若楓茶色になるも一盛り」 ほんたうにひと盛りですね。もう今は世間並みに唯水々しい鶯色《ひは
いろ》です。おや、障子に灯がともりました。

底本：「芥川龍之介全集 第十一巻」岩波書店

1996（平成8）年9月9日発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：松永正敏

2002年5月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校
正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。